海外アカデミック・ディスカッション		
キリスト教信仰に基づく舞踊観		
河田　真理		比較社会文化学専攻
期間	2008年７月26日～８月４日	
場所	イギリス	
研修交流プログラム	Springs Dance Company Summer school 祈り、聖書研究、ワーシップダンス、コンテンポラリーダンステクニック、創作、即興表現、上演	
施設	St Mildred's Centre　（聖Mildredセンター）	

○内容報告

現在、キリスト教プロテスタント教会の礼拝ではワーシップダンス、すなわち神への礼拝としてのダンスとしてあらゆるジャンルの舞踊を取り入れた礼拝が行われている。筆者は、修士論文において実地調査のためにロサンゼルスにあるGlory Christian Fellowship International（以下、GCFIと略記）という黒人系プロテスタント教会へ行きワーシップダンスの参与観察を行った。そこで、ダンサーと会衆の発言や相互作用からワーシップダンスの方法論とその理念について検証を行った結果、当事者にとってワーシップダンスとは、互いのために存在しているという自己の在り方を前提とした神への「奉仕」であり、それは同時に教会に集う人々への倫理的教育や心身の癒しを目的としていること、またあらゆる動きの源泉を祈りによる「聖霊の働き」に置いていることが明らかになった。

そこで、こうした方法や理念について他のワーシップダンスとの比較検証を行うため、特にこの黒人教会の事例とは対照的な白人文化圏におけるワーシップダンスに着目し、今回の海外アカデミック・ディスカッションでは、イギリスを中心に活動を行うクリスチャンのコンテンポラリーダンスカンパニー　Springs Dance Company（以下、SDCと略記）が主宰する５日間のサマーワークショップを実習の対象とした。SDCは、キリスト教的視点からダンスを通して信仰や人生の問題について探求すること、また教会や教育機関など様々なコミュニティにおける舞踊活動を奨励することを目的として、国内外の教会、大聖堂、劇場、学校等で舞踊作品の上演と指導を行っている。この５日間のワークショップには、25名ほどのあらゆるレベルのクリスチャンのダンサーが参加し、賛美・聖書研究・ワーシップダンスを含む祈りと礼拝に加え、コンテンポラリーダンスのテクニッククラスと創作、即興、上演という多彩なプログラムが組まれていた。

本実習の目的は、①ワーシップダンスの方法論と理念を検証すること、②キリスト教信仰に基づく舞踊観に着目してワークショップの参加者に参加目的・体験・気付きについてインタビュー調査を行い、参加者がワークショップを通してどのような事柄を達成したか、或いは達成しようとしていたのかということについての検証を行うことであった。

①については、参加者全員で手を繋ぎ円舞形式で踊るという聖書における「踊り」の記述にみられるもので、聖書時代の人々が「いつ」「何のために」「どのように」踊ったのかということについて参加者全員で議論を行いながら進められた。このワーシップダンスは、GCFIの事例とは形態としては異なるが、聖書における「ワーシップ（礼拝）」の意味に基づいて踊るという点において共通しているといえる。

また、②については以下のような結果が得られた。参加目的はダンステクニックの修得、聖書の言葉に基づいた創作手法の修得など具体的なものから、「神のために何かをしたい」という抽象的なものまで多岐に渡っていたが、全体に共通しているのは「自分の身体のすべてを用いて神を礼拝したい」という目的であり、ダンスを「神から与えられた賜物」として捉え、それを用いて神の愛にこたえたいというクリスチャンに特有の舞踊観がみられた。また、午前中の祈りの時

間には、「神の働きや恵み、家族や大切な人のことを考えた」という発言が多く、またこれらのことを他者と共有できたことへの喜びについて述べる者もいた。一方、コンテンポラリーダンスのテクニッククラスについては、身体の調子が良くなったという健康面での気付きのほか、「脊椎を真っ直ぐに立てるということや自身の身体に集中して丁寧に動くことは『神とつながっている状態』であり、そのときに心や感覚からではなく『聖霊』によって豊かさを感じる」、といった深い信仰心に基づく発言もみられた。そして、ワークショップ全体の気付きとしては、「私が私自身でいられることを発見した」「自分自身がどのような者であるかということがわかった」「踊ることに対して自信を持てるようになった」など多岐に渡っていたが、これらの発言は次の金子の言説に通じるものがあると考える。金子は「信仰」と「霊性」とを同義的に捉え、「霊性において人は自己を超越した聖なるものに出会うことができ、真の自己となる」[1] と述べている。つまり、参加者はワークショップにおいて祈りと身体の動きの探求を通して、「霊性」を高められ「聖なるものとの出会い」「真の自己との出会い」を何らかのかたちで体験していたものと思われる。

これらの結果とGCFIの事例とを比較すると、形態は異なるものの、その舞踊体験の中で身体的・精神的・霊的に感得されるものは共通すると思われる。これは、「ワーシップダンス」という言葉の持つ意味の多様性、また人種や文化を越えて共通する精神性を示唆しているといえる。このことは、インタビューの際にキリスト教の土台を持つ西洋文化におけるワーシップダンスとその土台の無い日本のワーシップダンスについて議論する中で実際に筆者が感じたことでもあり、今後、博士論文の執筆にあたり日本のキリスト教文化における事例を扱う中で比較検証すべき点であると考える。

今回の結果を踏まえて「キリスト教信仰に基づく舞踊観」について多様な文化におけるワーシップダンスの事例を扱うなかでさらに考察を深め、「舞踊学会」での発表や、『舞踊学』『表現文化研究』といった学術誌へ投稿していくことを予定している。

註

1）金子晴勇著『人間学から見た霊性』(2003) 教文館、東京.

かわた　まり／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻　表象芸術論領域

【指導教員のコメント】

修士論文では、ロサンゼルスにあるGlory Christian Fellowship Internationalという黒人系プロテスタント教会で行われたワーシップダンスを参与観察し、それをエスノメソドロジーを用いて分析することによって、ワーシップダンスの聖性をみた。この分野は先行研究がほとんどなく、またワーシップダンスは欧米に発し、その形態も多様であることから、事例を積み重ねながらワーシップダンスが普遍的にもつ聖性を探求することが必要である。今回のロンドンの St. Mildred's Centre で開催された白人文化におけるワーシップダンスのワークショップでは、文化の異なる参加者があり、派遣学生は参加者へのインタビューを通して、日本人として、またクリスチャンとしてのアイデンティティという視点から日本におけるワーシップダンスの聖性について考えるきっかけにもなっている。現在、この成果を「舞踊学」に投稿するべく準備中であり、学位申請論文執筆にあたって、それは主要な位置づけとなると思われる。派遣学生は、海外派遣アカデミック・ディスカッションの機会を得て、その機会を十分に生かして、ワーシップダンスの参与観察、インタビュー等を実施し、学位論文に向けての成果をあげたものと認められる。

（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　教授　柴　眞理子）